

アイロニー発話の解釈随意性が示唆する 発話理解の認知的構造

岡本雅史

0. はじめに

アイロニー発話はメタファーと並び、言外の意味を勘案することなしには決して理解できない言語表現としてこれまで多くの関心が寄せられてきた。しかしながらメタファーほど多くの分析が進んできたとは言いがたいのが現状である。本論では修士論文で行ったアイロニー発話の分析を元に、その後得た知見および考察をふまえて再分析を試み、今後発展されることが期待される新たな認知的語用論の見取り図を示すことが主眼となる。その際、先行研究として Grice を中心とする従来の語用論的分析および Sperber & Wilson らの関連性理論での説明図式の意義と問題点を明らかにし、そして近年の発達心理学の知見を考慮しつつ、最終的に筆者の提案する発話理解図式を概略していきたい。

1. 先行研究の意義と問題点

1.1. Grice のアイロニー分析

これまでの伝統的なレトリック研究において「字義通りの意味 (literal meaning) の反対を伝える文彩の一種」として意味論的な対象として扱われてきたアイロニー発話を、「字義通りの意味」を超えた「会話の含意 (conversational implicature)」としてアイロニーの意味が伝達されるのだとして、初めてアイロニーを語用論的な問題として取り扱ったのが Grice である。

Grice は「会話の含意 (conversational implicature)」という概念、そして四つのカテゴリーからなる「会話の格率 (maxims of conversation)」をその下位概念に持つ「協調の原則 (cooperative principle)」という観点からさまざまな言語現象に説明を与えた。Grice は、アイロニーをこの「会話の格率」の内の「質の第 1 格率」が意図的に違反 (flout) された例であると定義する。たとえば、Grice 自身の挙げた例を引くと以下の通りである。

- (1) (仕事上で裏切られた親友 X に対して) X は素晴らしい友達だよ。

話し手と聞き手にとって、字義通りの発話内容を話し手が信じていないことは明らかであり、話し手の発話が無意味なものでなければ、話し手は今自分が提出している命題と異なる何らかの他の命題を伝えようとしているに違いない。それは何らかの明白に関係のある命題でなければならない、そして最も明白に関係している命題とは、すなわち今現在提出している字義通りの命題の反対命題である (cf. Grice 1989: 34)。しかしながら後の議論において Grice は、含意内容の同定の説明に対してその曖昧さを指摘される。たとえば、(1) の含意が実際は次のようなものである可能性をどのように排除すべきかという視点が欠けているとの反論である (*ibid.*: 54)。

- (2) X はいつもは素晴らしい友達だよ。なのに、どうして彼は私にあんなことができたんだろうか？

これを受けて Grice はまず、単なる事実の反対命題の提示だけではアイロニーたりえないとし、アイロニーは否定的な感情や態度および評価を表わす表現と密接に関連していなければならないことを付け加えた。また、アイロニカルな音調の存在に関しては、もしそのような音調がアイロニカルに響くとすれば、当該発話がアイロニーであると察知された結果として認識されたに過ぎないと Grice は主張する。

1.2. Grice 説の問題点

こうした Grice のアイロニー分析が優れていた点はとりもなおさず、「協調の原則 (CP)」および「会話の含意」というコミュニケーションにおける普遍的な原理を措定することにより、アイロニーが発話全般の中にどのように位置付けられるかを示した点にある。しかしながら、後に多くの研究者たちが指摘したように、Grice のアイロニー分析はその曖昧さゆえに多くの問題点を抱えている。たとえば、次のようなアイロニー発話の例を考えてみよう。

- (3) A: これでも僕は登山部の部長だったんですよ。
B: ほう、君が部長ねえ。
(4) (興奮のあまり普段ならありえないような聞き間違いをした友人に対して)
あなた、日本語はわかってますか？

(3) の B の発話は、Cutler (1974) の言う 'provoked irony' の訳語として「おうむ返しのアイロニー」(安井 1978) や「こだま的アイロニー」(橋元 1989) と呼ばれるもの

で、(1) のようないわゆる字義通りの逆の意味を含意すると考えられる「自生的アイロニー (spontaneous irony)」と区別される。このようなアイロニーの場合は字義通りの命題の反対命題を想定するのが難しい。また、(4) はいわゆる Yes-No 疑問文の形式を持つアイロニーの例であるが、定義上 Yes-No 疑問文は真理値を持たないので反対命題を持ちえない。しかも、(3) (4) とともに表面上「質の第1格率」 (= 「偽りであると思っていることは言うな」) に違反しているわけでもない (cf. 橋元 1989: 70)。このようなタイプのアイロニー発話の場合は Grice の分析が妥当しないのである。

1.3. Leech のアイロニーの原理

また、Leech (1983) は Grice の CP に基づきつつそれを発展させる形でアイロニーの原理 (irony principle) > を規定した。すなわち、アイロニーは「表面的には協調の原理を破りながら、最終的にはそれを支持することによって、その機能を果たす」 (Leech 1983: 207) ものであるとし、つまりはアイロニーを「丁寧さ (politeness) の原理を踏まえて成り立つ、あるいはそれを利用する原理」 (ibid.: 115) であり、二次的な原理であると見なしている。たとえば次のような例を考えてみる。

- (5) (掃除の時間にサボっている生徒に対して) お疲れのところ申し訳ないが、手伝ってもらえないかな。
(滝沢・伊藤 1993)

このとき聞き手である当の生徒は、この原理に従えば「先生が言っていることは私にとって礼儀にかなっており、それでいて明らかに真実ではない。つまり、本当には『お疲れのところ申し訳ない』と思っていないはずである。よって、先生が真に意味していることは、私にとって無礼なことであり、しかも真実である『やるべき掃除をしていないから疲れてなぞいないだろう』というようなことであろう。」というように推論し解釈するとされるのである。

また、Grice においてはもっぱら「質の格率」違反にのみアイロニーの特質を置いていたのに対し、Leech は次のような例では「量の格率」に違反したアイロニーが存在することを指摘する。

- (6) (会社の送別会にて)

A: 山本と住田がいなくなるとうちの部署も寂しくなるな。

B: ああ、住田がいなくなると寂しくなるだろうね。

(6)において、Bは表面上「量の格率」に従っておらず、話し手Bは「自分たちの部署の全員が山本の退社を寂しく思うとは限らないであろう」という意見を含意していると考えられる。Leechに従えば、Bはもっと多くの情報を盛ることができたはずであるが（つまり「でも、山本はそうでもない」などと付け加えることによって）、もしそうしたとしたら、聞き手に対してもっと無礼に振る舞うという代価を支払わざるを得なかったであろうから、Bは丁寧さの原理を守るために望まれている情報を抑えたのであるとされる (cf. *ibid.*: 112)。

1.4. Leech 説の問題点

しかしながら、このようなLeechの分析は発話理解の認知的観点から見ると以下のような問題点を抱えている。第一に、「丁寧さ」の基準がどのレベルにおいてのものであるのかが不明瞭である。たとえば、先述した(6)の例において、もしBが直接的に「いや、山本はそうでもないよ」と言ったとする。Leechに従えば、この発話は聞き手Aに対してもっと無礼な振る舞いになることが予想されるはずである。しかしながら、Bが(6)のようにアイロニカルな発話をした結果は、実際のところ、直接的な否定であるよりも強烈な効果を聞き手に与える可能性が高い。第二に、Leechが言うように「アイロニーの原理」が「丁寧さの原理」を踏まえた二次的原理であり、もし聞き手が実際にこのような諸原理を利用しているとすれば、字義通りの発話よりもアイロニーの方がその了解に至る時間は長くかかるはずである。しかし、実際にはそのような事実はなく、言語心理学的実験に基づく知見によっても、むしろアイロニー発話の方が字義通りの発話よりも早く処理されることがあることが示されている (cf. Winner 1988: 155)。

このように、Leechのアイロニー分析は、話し手の意図の説明に対しても、また聞き手の認知プロセスの説明に対しても、それほど有効性が高いものとは言えない。また、Griceの分析の持つ問題点も未解決のままである。

1.5. Sperber & Wilson の関連性理論による分析

前節で見たように、Griceおよび彼の影響を受けた研究者たちは、「字義通りの意味」を超えた「会話の含意」としてアイロニーの意味が伝達されることを語用論的な問題として取り扱ってきたが、その意味を「字義通りの意味の反対命題」としている点で大きな困難を生じていた。これに対しSperber & Wilsonは、これまでの分析を批判し、そもそもアイロニー発話において話し手は言語を通常の意味で「使用(use)」しているのかという根本的な疑問を提出している。

Sperber & Wilson (1981)において彼らは、言語の「使用(use)」と「言及(mention)

」の区別に基づく新しいアイロニーの説明理論を提唱した。これまでの考えでは「ある表現が指示 (refer) している対象に対する指示 (reference)」をその表現の「使用 (use)」と呼び、「ある表現がその表現自身を指示している」とき、その表現の「言及 (mention)」と呼ぶのであるとされてきた (Sperber & Wilson 1981: 554)。しかしながら、言語の「使用」と「言及」の区別がそんなに単純には行かない例が自然言語においては多数存在する。たとえば次のような例である。

(7) A: 昨日彼女になんて言われたの。

B₁: 「もうあんたの顔なんか見たくないわ」だって。

B₂: もう俺の顔なんか見たくないんだって。

(7) の例において、B₁ は「彼女」が言った台詞そのものを再生しており、B₂ は「彼女」の台詞の意味内容を再生している。純粋に「言及」という場合は、B₁ のような「言語表現」の言及の場合のみを指すのだが、Sperber & Wilson は B₂ のような「命題」の言及をも「言及」のカテゴリーに含め、前者を「直接的引用」、後者を「間接的引用」として区別した (Wilson & Sperber 1992: 59)。さらに、この間接的引用はその目的によって二つに分類される。つまり、言及されたもとの発話を報告するための目的でなされた言及と、報告だけでなく同時にそれに対する話者の態度や反応を表現するためになされた言及の二つである。Sperber & Wilson は前者を「報告 (reporting)」, 後者を「エコー (echoing)」と呼んで区別した。たとえば、(7) の例において B の発話が彼女の言った台詞を A に伝えるためだけになされたとすれば「報告」であり、同時に彼女の台詞に対する B の今の気持ちや態度を A に伝えるためになされたのであれば「エコー」であると考えられている (cf. *Ibid.*: 59)。

彼らの説に従えば、アイロニーはまさしくこの「エコー的言及 (echoic mention)」の一種であるとされる。たとえば、先に挙げた「おうむ返しのアイロニー」である (3) の例において、B の発話の目的は従来の語用論者が言うような「字義通りの意味の反対」を A に伝えることではない。A の発話において表わされた意見に対する自分の態度を表明することが目的なのである。従って、ある発話がアイロニーであるとわかるためには、聞き手はその発話が「言及」であることに気付き (realize), 言及されている命題に対する話者の態度を認識 (recognize) するだけでよい (cf. *Ibid.*: 60; Sperber & Wilson 1981: 557)。

しかしながら、例 (3) のような「おうむ返しのアイロニー」の例では言及される対象としての元の発話命題 (この場合であれば A の発話の一部) が明示的に存在するので B の発話が言及であることは容易に理解されるが、従来のアイロニー分析で

中心的に扱われてきた「自生的アイロニー」、つまり、少なくとも一見では「字義通りの意味の反対」を伝えているように見えるアイロニーの例では何が言及されているのかが不明瞭である。これに対して、Sperber & Wilson は、このような「自生的アイロニー」を「特定の人物に帰することはできないが、あるタイプの人物像や一般的な人物イメージに帰することができるもの、すなわち文化的な願望や規範など (Wilson & Sperber 1992: 60) がエコーされた例である」として、聞き手にとって「言及」であると認識するのが「おうむ返しのアイロニー」ほど容易でない例として説明した。結局どちらのアイロニーも、「非明示的に持たれていると考えられる意見をエコーし、同時に自分自身をそれから分離 (dissociate) させている」点では共通しており、「個々のアイロニーはその分離の理由によって異なっている」とされる。そして、おそらく最もその分離が明らかな例が、「エコーされた意見が偽であると話者が信じている」場合で、そのとき話者の含意は「字義通りの意味の反対」という結果になるのだとして、彼らはこのエコー説が従来のアイロニー分析の論点に矛盾せずに包括的な説明が可能である点を強調している (*ibid.*: 60-61)。

それでは聞き手は、当該発話がどうして話者によってエコーされたことに気付き、エコーされた命題に対する話者の態度を正しく認識することができるのだろうか。Sperber & Wilson (1981) ではこれに対し、「話者による語彙選択、話者の音調（疑わしそうな口調、軽蔑的な口調、侮辱的な口調など）および文脈情報 (Sperber & Wilson 1981: 557)」があらゆるエコー発話の了解を決定する役割を果たすとしているとする。つまり、聞き手は当該発話がエコーされていることを知るために必ずこのような「反語信号 (cf. Weinrich 1967)」に気付かなくてはならないのだと彼らは主張する。

1.6. エコー説の意義と問題点

彼らのアイロニー分析が優れている点はまず第一に、これまでの意味論・語用論的分析がどうしても脱することのできなかった「字義通りの意味の反対命題」がアイロニーの伝達する意味であるとする前提を排除し、そもそもアイロニーが通常の言語使用ではなく元の発話および思考のエコー的使用なののだとして、アイロニーが伝達する意味をエコーされた元の発話および思考の対する話者の態度（特に、嘲りや軽蔑など）であると規定した。その結果、「字義通りの意味の反対命題」は何であるのかということや、どのようにして意味が反転するのかという、従来の分析で生じた問題点は全て解消される。聞き手は、当該発話がエコーであることに気付き、エコーされた発話命題に対する話し手の態度を同定しさえすればよいのである。このように、アイロニー発話が伝達するものが命題形式の含意ではなく発話者の態度

であるという指摘は現在でも多くの研究者に共有されており、本稿の立場とも共通している。また第二に、語用論分析の問題点であった推論過程の複雑化の問題も Sperber & Wilson の枠組みにおいては解消されている点も重要である。たとえば、Leech の説明に見られるような、聞き手が当該発話をアイロニーであると認識するために二重のステップをたどらねばならないという直感にそぐわない説明よりも、発話に付随する反語信号によって、聞き手が当該発話をエコーであることを理解し話し手の態度を認識するとするエコー説の方が説明力大きい。

しかしながら Sperber & Wilson によるアイロニー分析も完璧とまでは言えず、エコーされる対象の内容が曖昧な点は大いに問題とされるべきである。

- (8) (珈琲を頼んだのに間違えて紅茶を買ってきた妹に対して) ああ、おいしい。この珈琲。
(滝沢・伊藤, 1993)

たとえば、この (8) の例における「おいしい」という発話命題は社会的・文化的な願望や規範と言いがたいし、そもそも話者が飲んでいる「紅茶」が「おいしい」かどうかは、この場合当該発話がアイロニーであることとは関係してこないはずである。つまりこの例では、Sperber & Wilson が言うような文化的な願望や規範などでも非明示的に持たれていると考えられる意見などでもなく、発話それ自体に対して発話者自身が距離を取っているのである。

1.7. 橋元の仮人称発話説

橋元の「仮人称発話説」は Sperber & Wilson (1981) で主張された、アイロニーが言語の「使用」ではなく「言及」であるという観点に基づきつつ、さらに発話者の視点としての「人称」の持つ機能を重視した説明図式である。ここで言う「仮人称」とは「自分以外の仮想の人物に視点を移し、その人物に『話し手』の役割を担わせて発話行為を遂行する (橋元 1989: 86-87)」ことであり、このように遂行される発話を「仮人称発話」とであると定義する。彼によればアイロニーはこの「仮人称発話」の一種であり、たとえば、Grice の用いた (1) の例をこの観点から説明すると次のようになる (図 1 参照)。

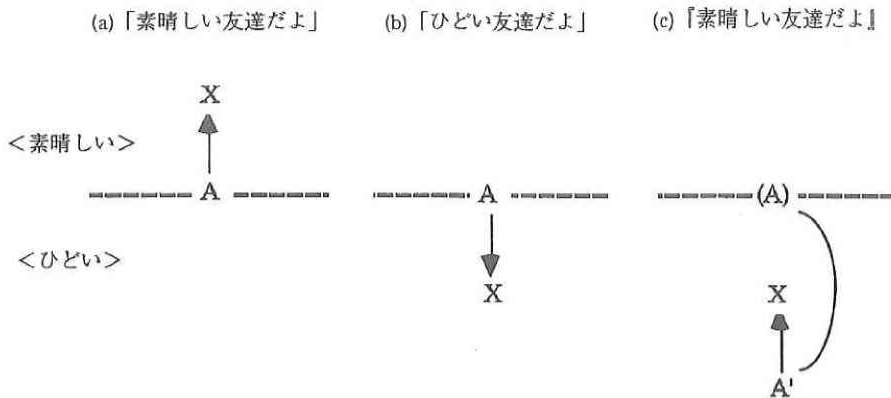


図1 仮人称発話説

この時、(a) と (b) は字義通りの発話を行った場合、そして (c) は (1) の発話に見られるように、アイロニカルな意味で (a) と同じ発話を行った場合を各々表示するとされる。そして上下の距離は「素晴らしいーひどい」に関する評価レベルを表わし、点線は相対的な平均水準の位置を示すとされる。この場合 (c) のように対象 X の位置が水準以下であっても、それに対して「素晴らしい」という評価を与えることができる立場の人間が存在するはずで、これを A' とすれば、この A' の視点に立てば (1) の発話を行っても「字義通り」とであると解釈されるはずである。

これが「仮人称発話」と呼ばれるアイロニーのメカニズムであり、現実には (b) の状況にある話し手 A が、A' の位置に視点を仮設して (a) の状況の命題を「言及」的に陳述するという形態の発話行為を行っているのだと橋元は主張する。

これによって、Sperber & Wilson (1981) の「エコー的言及」説のような「社会的・文化的願望や規範」という曖昧な言及対象を持ち出さなくとも、「自生的アイロニー」についての説明が可能であり、また、なぜ直接的に非難をするよりもアイロニーの方が強い効果を持ちえるのかも説明できるとするのだが、たとえば前者に関しては、「発話視点の仮設が、状態・地位・身分に関する評価的レベルにおいて垂直的かつ下方向の移動による (橋元 1989: 88)」場合が自生的アイロニーであるとされ、後者に関しては、A—X—A' の距離の方が A—X の距離よりも大きいからであると説明される。また「おうむ返しのアイロニー」に関しては、発話視点を皮肉る対象に仮設しているとされ、単なる「言及」ではないのだとされる。

さて、こうした橋元のアイロニー分析は、Sperber & Wilson の「エコー的言及」説を改良し新たな観点を組み入れたものであるが、この「仮人称発話」という概念

はかなり限定的な概念であるために一部のアイロニーの特徴にしか当てはまらず、この概念では説明できないアイロニー発話が多数残されているという問題点がある。例えば先に触れた(6)は、Leechの言う「量の格率に違反したアイロニー」の例であるが、このBの発話の場合、Bは評価レベルで下方向に垂直的な発話視点の移動を行っているとは考えにくい。しかも、そもそも現在自分が置かれている状況から発話視点の移動させている訳ではない。すなわち、発話視点の移動なしに「字義通りの」意味を伝えていながら、「山本がいなくなってもみんなが寂しく思うわけではない」といった含意を伝えているのである。また、次の例でも同じことが言える。

(9) (できの悪い生徒が白紙で出した答案を見て) おお、美しい答案だね。

この場合も含意として「私の望んでいるのは『美しい』答案ではなく、よくできた答案なのだよ」というような意味を伝えており、「美しいー汚い」といった評価レベルは関係してこないはずである。このように「仮人称発話」説は字義通りの意味を否定することなく、含意レベルでアイロニカルな意図を伝えていると思われる例に対してはアプローチできないのである。

結局、これまで見てきたように、アイロニー発話はおそらく「直接的に否定的な感情を示さずに、間接的に含意として否定的な態度を伝える表現」であるとしか説明できないものであり、「仮人称発話」という概念で説明可能なアイロニーはそれらのごく一部に過ぎないのである。

2. 発話理解の認知的構造

2.1. 含意の解釈随意性

以上見てきたように、これまでの研究でアイロニー発話の分析は意味論的対象としての<文彩的意味>から語用論的対象としての<含意>へ、そして言語の使用から言及へと大きな理論的転回を迎えてきた。Grice派の分析があくまで「字義通りの命題の反対命題」にこだわるあまり、アイロニーで伝達されるのは命題形式でパラフレーズ可能なく含意>であることを自明視してきたのに対し、Sperber & Wilsonや橋元は「言及」や発話視点の仮設といった形でアイロニー発話が含意という<発話者の意味>よりもむしろ<発話者の態度>を伝える表現であることを示唆した。ここにおいて、アイロニー発話をそれとして「了解」することは、当該発話が実際には意味したであろう含意の復元を目的とする発話「解釈」と同義ではなく、含意を復元することなく話し手の態度や感情を察知することでも達成されることが

明らかにされたと言える。

ただし、必ずしもアイロニー発話の理解は含意の復元を随伴しないというわけではない。先に述べたようにおうむ返しのアイロニーは含意の復元、つまりアイロニーを用いなければ直接的に意味したであろう命題の復元は困難であるのに対し、自生的アイロニーでは Grice 派の指摘を待つまでもなく非常に容易に達成される。しかしながらおうむ返しのアイロニーでもその含意を復元することは聞き手に許されている。このように含意の復元が随意的 (optional) に行われることを「解釈随意性」と名付けておけば、実際にはアイロニー発話以外の様々な発話でこのような解釈随意性が見られることがわかる。例えば次のような例を見よう。

- (10) (仕事で失敗して落ち込んでいる人に対して子供が) 人生いろいろだよ。

このように発話をされた大人は大抵「生意気な子供だ」とか「慰めてくれているのだな」という風に、発話者に対するイメージを作ったり発話の意図ないしは行為を同定することで発話処理を終えてしまうであろう。もちろん「人生にはいろんなことが起こるものであり、それらの一つ一つが善かれ悪しかれあなたにとって重要な意味を持っているのだ。だから今はそんなに落ち込まないでいつものあなたらしく生きなさい」ということを発話者である子供が含意していたとまで推論することは可能であるが、(幾分誇張されているとはいえ) このような含意をわざわざ同定することなく当該発話の理解が達成されるのが普通である。

結局、発話理解において含意の復元は発話処理を行った結果産出される情報の一つに過ぎないと言える。また (10) の例で述べたような話者イメージや発話意図もまた同様に発話処理の結果得られる情報であり、こうした情報が導出されることで聞き手は発話理解を達成したと考えるのである。

2.2. アイロニー発話の検出

また、これまで提出されてきたアイロニー発話の論点において問題となっていたことの一つに、アイロニーにはそれを告知する「反語信号」が必要であるか否かという点が挙げられる。不必要であるとする Grice 派の立場と、必要であるとする関連性理論と橋元の立場があるが、本稿では反語信号は当該発話をアイロニーであると検出するための一つの条件であるとし、必ずしも必須のものとは考えない立場を取る。これに関して、発達心理学者の Winner は心理学の立場からアイロニーとメタファーをどちらも非字義的な言語表現であるとして同列に分析しているのだが、彼女はそうした非字義表現を検出するのに (1) 非字義的な意図の検出、(2) 文と話し

手の意味との間の関係の検出、(3) 話し手の意味の検出という三段階のステップが必要であると主張している。そしてアイロニーの場合、子供は最初のステップである意図の検出が大人よりも困難であり、たいていの6歳以下の子供は表わされた事態と言葉のミスマッチに気づきはするが、それを通常単なる「嘘」であるのとったり「言い間違い」であると考えてしまう傾向がある (Winner 1988: 10-13)。

この事実が示唆するのは一見反語信号の必要性であるように思われるが、実際は話し手の意図に対する感受性を発達させた大人にとっては、逆に表わされた事態と言葉のミスマッチに加えて、話し手の信念に関する知識（例えば、皮肉られている人物に対する日頃の評価など）を勘案することでアイロニーとして理解することは可能なであることをも意味している。反語信号はそれを補完し処理を容易にするものであり、必ずしも必要なわけではない。たとえば話し手によって指示された対象が聞き手にとって全く未知の存在であっても反語信号が存在してさえいればアイロニーとして了解は可能であろう。この時聞き手はアイロニーであることを知った後に、発話によって表わされた事態が真実ではないことを発見するであろうが、逆に先に挙げた例のように、表わされた事態と言葉のミスマッチによって当該発話がアイロニーであることを発見する場合も存在する。いわばこの発話処理の双方向性こそが、われわれの認知プロセスの本質的な点であると筆者は考える。

2.3. 発話状況のリアリティ・スキーマ

さて、ここでいったんアイロニーから離れて、より一般的に解釈者であるわれわれが一体どのような発話が行われた事態を認知しているのかについて考察してみることとする。

別の場所で既に述べたことだが、われわれの認知プロセスを支えるのはわれわれ個々人が持つ「リアリティ」の恒常性であると筆者は考える (cf. 岡本 1999)。われわれはさまざまな事象に対してそれぞれ「リアリティ」を持っており、対象間の関係はこのリアリティのネットワークで表現される。これは認知科学で言われるスキーマやフレームに近いものであるが、スキーマやフレームが本質的に有限で明示化可能な知識のネットワークを含意しているのに対し、実際にわれわれの認知プロセスの中で再構成されるのは、そのような明示的に記述可能な知識などではなく、ある種のブレイクダウンが起きたときのみに初めて対象化されるような前知識ではない。こうしたリアリティはあくまでも非明示的な（つまりあらかじめ意識されない）規範としてわれわれの認知を支えているのである。こうしたリアリティを単純化して明示化したものがスキーマなのであるといつて良いだろう。

そして発話がなされる規範的な場面をわれわれは容易に思い浮かべることができ

る。それはとりもなおさず、これまでの知識と経験によりある発話や言葉がある事態ないしは対象を意味することをある話し手が行っているというスキーマ化されたパターンを解釈者があらかじめ獲得しているからである。しかしながらこれが意識上に上ることは日常では存在しない。ただ、この言葉・事態・発話者のいずれかが何らかのズレを起こしているときにのみズレ（ないしは違和感）の源泉として感知されるのみである。仮に実際に「雨が降っている」という事態を「雨が降っている」としてある話し手が語っていたとしよう。その場合は一見何らズレを引き起こしていないように思われる。つまり Sperber & Wilson が言うところの聞き手の認知環境はほとんど改変されることがない。しかし、このときあり得べき規範的な話し手は聞き手にそのことを知らせる意図でこの発話を行っているはずであると聞き手は判断しているのだが、もし仮に実際の聞き手がすでに雨が降っていることを知っていることを話し手が知っているはずだと考えたとした場合、ここにおいて聞き手はズレを感じ、そのズレを解消するために認知的操作を行うはずである。つまりは当該発話状況に対するリアリティを改変することで維持しようとするのである。またこのスキーマ的な知識があるからこそ、われわれは言葉や事態および発話者のいずれかが欠けているときにも理解可能なのである。ここで具体的に筆者が現時点で考える発話状況のリアリティをスキーマ化すると次のようになる（図2）。

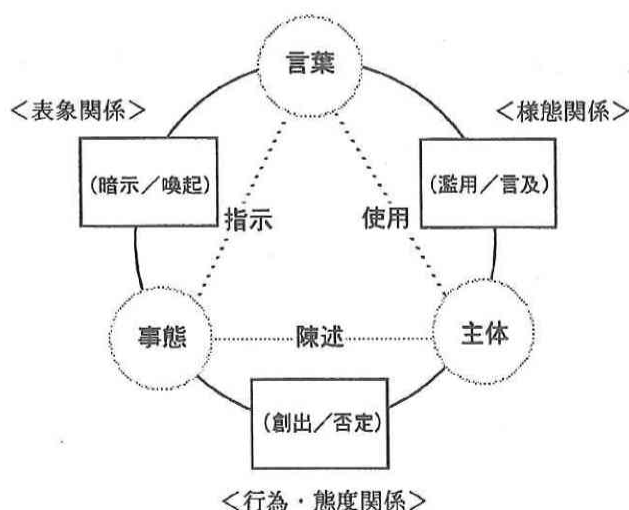


図2

すなわち、発話が行われる状況において、言葉（ないしは発話）と事態（ないしは対象）と主体（ないしは発話者）がそれぞれ相互に関連するネットワークを構成しているとする。そしてわれわれのリアリティにおいては規範的な関係が存在しており、たとえば、発話者と言葉の間には<様態関係>として通常（つまりデフォール

トとして)「使用」という関係が成立し、同時に発話者と事態の間の〈行為・態度関係〉は通常は「陳述」であるとする。そして言葉は事態を「指示」しているという〈表象関係〉も通常は維持されているとする。そして一種の恒常的安定状態を動的に維持するために、こうした項や関係がゆるやかなネットワークを築いていると考えられる。しかしながらスキーマであれば明示的な知識の集合として表わされるように思われるが、先述したように実際にはこのネットワーク間で何らかのズレが起きた時に限りその部分が焦点化されてカテゴリー化される性質を持っていると考えられるので、表記上は図2のように点線で描かれる潜在的なスキーマであるとする。

しかしながら発話は常に安定した状態で処理されるとは限らない。たとえば、主体が言葉を通常の意味で使用していない場合、両者の様態関係を改変する必要が聞き手によって生じる。たとえばデタラメな発話を話し手が行っているとしたならば、それは主体が言葉を〈濫用〉していると考え、また言葉がある事態を指示するのではなく言外にほのめかしている場合は〈暗示〉という関係が言葉と事態の間に成立していると聞き手は考える(ただしそれぞれの項関係は図2に挙げたものに限定されないので括弧付きにしてある。)この時、重要なことはわれわれの発話理解において、そのような〈関係〉ないしはその新たな関係を取結ぶ二項のうちのいずれかが対象化される(=同定される)ことによって理解が達成されることである。例えば、ある発話がある事態を〈暗示〉しているとき、われわれは暗示された事態、すなわち「含意」を復元することによって理解を達成してもよいし、当該発話を『含意表現』『遠回しな言い方』などの名を与えることによって理解を達成してもかまわない。そのようにいったん発話がなされた状況を把握した上で、他の項や関係を同定していくことは先に述べたように随意的なものであると考えられる。

2.4. リアリティ・スキーマに基づくアイロニー発話の分析

このようなスキーマに基づいてわれわれの発話理解処理が行われていると考える利点は、(1)さまざまな言語現象を統一的に記述する可能性を持っていること、(2)解釈随意性を表現することができる点、(3)同一の発話状況が異なった形で処理されることを記述できる点などにある。

具体的にこれまで取り上げてきたアイロニー発話を二種類取り上げて分析してみることとする。

- (11) (仕事上で裏切られた親友Xに対して) Xは素晴らしい友達だよ。

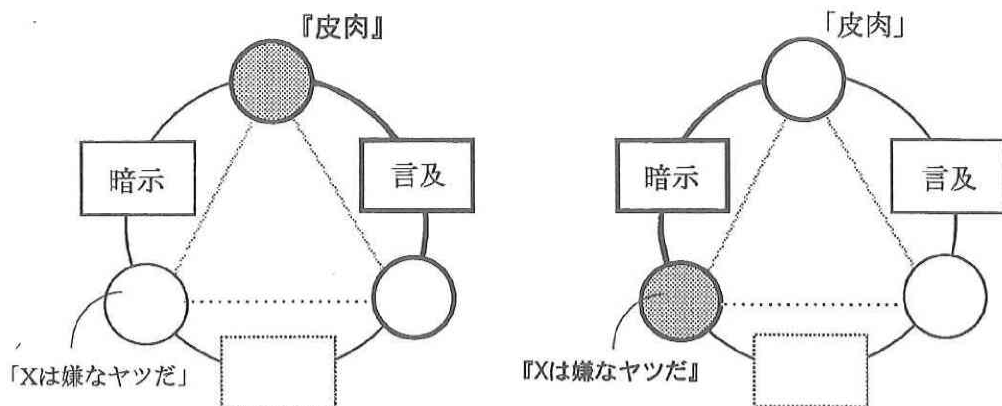


図3 自生的アイロニーの処理プロセス

図3ではこの発話の二通りの解釈を示した。太線で示されているのは発話処理プロセスにおいて聞き手によって規範的な状態からのズレとして焦点化された関係とその項目であり、塗りつぶされているのは聞き手が認識し同定した情報であるとする。また実線は随意的なプロセスを意味し、点線は聞き手のリアリティに則っており、同定や改変の必要がないことを示す。

左の図では話し手と発話が何らかの反語信号によって＜言及＞関係にあると聞き手に感知され、その結果発話の方を『皮肉』として同定することで発話処理を完了したことを示した。この場合、＜暗示＞を媒介として「Xは嫌なヤツだ」という含意が同定されることは随意的である。そして右の図では発話が指示するはずの事態（＝「Xは素晴らしい友達である」）が、聞き手が把握する現実の事態と乖離していることから、実際は＜暗示＞の関係にあることを感知することで聞き手が話し手の意図した含意を同定する場面を想定している。この場合も聞き手が当該発話を「皮肉」として同定することは随意的である。

また、図4のようなおうむ返しのアイロニーでは図3の左図のように当該発話を『皮肉』として同定される場合と、Aを馬鹿にするような口調という反語信号から直接発話者の馬鹿にしたような態度（ないしは軽侮行為）が同定される場合の両者を図示している。

- (12) A: これでも僕は登山部の部長だったんですよ。
B: ほう、君が部長ねえ。

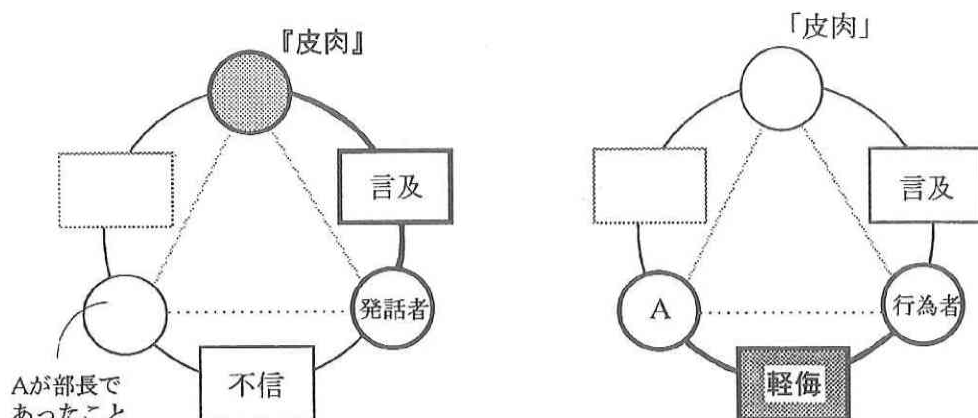


図4 おうむ返式的アイロニーの処理プロセス

このとき、右の図のように発話状況において＜行為＞が対象化される場合、当該発話を行った主体は発話者というよりもむしろ行為者として同定されており、また主体が何らかの態度や行為を向ける項も事態から対象へと変更されている。このようなプロセスは、同じく主体と事態／対象との間の＜行為＞を対象化する発話行為の遂行文においても見ることができるであろうが、紙幅の関係上別の機会に詳述したい。

以上見たように、アイロニー発話は解釈者の認知的な処理プロセスの違いとして大きく分類することは可能であろうが、実際に注目しなければならないのは同じ言語形式を持って発話されたとしても、解釈者がどのような情報に基づいて処理していくかによって異なった焦点化と同定を行っていく可能性である。この「主体的認知解釈」とでも呼ぶべき点は従来の研究では明らかにされなかった点であり、同時にさまざまな言語現象を分析し記述する上で重要な論点を内包していると考えられる。

3. おわりに

これまで文の意味から話し手の意味、そして話し手の態度や行為といった方向へいわば外へと広がっていく形で語用論的研究は進んできたと言えるが、これからの語用論はわれわれの認知という普遍的なプロセスに根ざしたより大きな視点で捉えたものである必要がある。本稿で提出した理論的枠組みはまだ端緒についたばかりであり改良の余地が多分に残されてはいるが、今後確立するであろう「認知語用論」という方向性を些かなりとも示すことができたと思ふ。

参考文献

- Cutler, A. 1974. "On saying what you mean without meaning what you say." In M. W. Lagaly, R. A. Fox, & A. Ruck ed. *Papers from the 10th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Duranti, A. 1988. "Ethnography of Speaking: Toward a Linguistics of the Praxis." In F. J. Newmeyer ed. *Linguistics: The Cambridge Survey Volume IV: Language: The Socio-cultural Context*, 210-228. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 橋元良明. 1989. 『背理のコミュニケーション』 東京: 勁草書房.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Ltd.
- Minsky, M. 1986. *The Society of Mind*. Simon & Schuster. (安西祐一郎 (訳) 『心の社会』, 東京: 産業図書, 1990)
- 岡本雅史. 1996. 「階層的発話解釈モデルによるアイロニー発話の了解および解釈プロセスの分析」, 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士論文.
- 岡本雅史. 1997. 「発話行為の潜在的人称構造」, 言語科学論集 第3号, 1-15.
- 岡本雅史. 1999. 「コミュニケーションを支えるリアリティの恒常性」, 京都大学人間・環境学研究科フォーラム, 口頭発表.
- Searle, J.R. 1979. *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. 1984. "Verbal Irony: Pretense or Echoic Mention?" *Journal of Experimental Psychology: General*, Vol. 113, No. 1, 130-136.
- Sperber, D. & D. Wilson. 1981. "Irony and the use-mention distinction." in S. Davis ed. 1991. *Pragmatics*, 550-563, Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. & D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. Second Edition.
- 滝沢修. 1992. 「アイロニーの検出について」, 『自然言語処理』, 92-8, 57-64.
- 滝沢修・伊藤昭. 1993. 「アイロニー表現の収集と分析について」, 情報処理学会第47回全国大会, 口頭発表.
- Watzlawick, P., J. B. Bavelas, & D. D. Jackson. 1967. *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. New York: Norton.
- Weinrich, H. 1967. *Linguistik der Lüge*. Verlag Lambert Schneider. (井口省吾 (訳) 『うその言語学』, 東京: 大修館書店, 1973)
- Wilson, D. & D. Sperber. 1992. "On Verbal Irony." *Lingua*, 87, 53-76.
- Winner, E. 1988. *The Point of Words: Children's Understanding of Metaphor and Irony*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 安井稔. 1978. 『言外の意味』 東京: 研究社出版.